

『源氏物語』 停滞する中の君物語

—— 椎本卷 「かざし」 詠を中心に ——

磯部 一美

はじめに

「源氏物語」「宇治十帖」に登場する女君のうちの一人中の君は物語中に十九首の和歌を詠んでいる。中の君に関する論考は決して少なくないが、その（詠歌）に注目しそれを主眼として論じたものは、管見に入った限りではほぼ皆無に等しい。しかし和歌がその独自の表現性や伝達機能によって物語の世界に深く浸透してくるものであり、散文表現とは一線を画す特殊な表現領域を占有する言語である以上、そこに記されたものの意味を問うことは決して無意味ではあるまい。

本稿では、結婚前中の君が匂宮と交わした二組の贈答歌を取り上げる。両者は結婚前までに幾度となく歌を取り交わしたと語られるが、その詠歌が具体的に物語中に描かれるのは、ここに取り上げる椎本卷の二度の贈答のみである。また二度目の贈答は、一度目の贈答を踏まえる形で詠まれていて照応性が強く見られる。このことについては、既に大君論の立場から小町谷照彦氏によって、「総角への物語の展望を含みつつ薫と大君の交渉の追求が一段落した部分で、間奏曲的に挿入されたものである⁽²⁾」との見解が示されているが、しかし中の君論の立場から考えれば別の見方もまた可能であるように思われる。

大君を中心とした一連の物語の流れの中で、中の君物語がどのように生成されていったのか、その単純ではないありようを「かざし」詠を中心として読み解いてゆく。

一、宇治〈中宿り〉の場面——中の君と匂宮の出会いの〈場〉として——

椎本巻は、匂宮の宇治への中宿りの場面から語り起こされる。荒れ果てた律の宿に高貴な姫君を見い出す——この発想は当時好まれた恋愛の一つの〈型〉であり、かねて薫から宇治八の宮家の姫君たちの噂を聞いていた匂宮は、姫君たちへの関心から、初瀬詣でを口実として宇治を訪れたのであった。今をときめく帝の寵児匂宮の宇治訪問の様子は「上達部」とあまた仕うまつりたまふ。殿上人などはさらにもいはず、世に残る人少なう仕うまつれり」⁽³⁾「椎本一六九頁」、⁽³⁾「所につけて、御しつらひなどをかしうしなして：夕つ方ぞ御琴など召して遊びたまふ」⁽³⁾「椎本一七〇〜一七一頁」と都の栄華を現出させたかのように華やかで、これに触発された八の宮は、あたかも都社会からの疎外感を訴えるように薫に歌をおくる。これに匂宮が返歌、薫がそれを携えて八の宮邸を訪れることによって、初めて匂宮と八の宮家の交流がはかられることになる。

かの宮は、まいて、かやすきほどならぬ御身をさへところせく思さるるを、**かか**るをりにだにと忍びかねたまひて、おもしろき花の枝を折らせたまひて、御供にさぶらふ上童のをかきして奉りたまふ。

① 「山桜にはふあたりにたづねきておなじかざしを折りてけるかな

野をむつまじみ」とやありけん。御返りは、いかでかはなど、聞こえにくく思しわづらふ。**かか**るをりのこと、わざとがましくもてなし、ほどの経るも、なかなか憎きことになむしはべりし」など、古人ども聞こゆれば、中の君にぞ書かされたまつりたまふ。

② 「かざしをる花のたよりに山がつの垣根を過ぎぬ春の旅人

野をわきてしも」と、いとをかしげにらうらうじく書きたまへり。

げに川風も心わかぬさまに吹き通ふ物の音どもおもしろく遊びたまふ。

〔椎本一七四―一七五頁〕

対岸で饗応を受ける薫一行に対し、身分柄そこに留まらざるを得ない勾宮であつたが、姫君たちへの思いは止みがたく、せめて「かかるをりにだに」と今度は直接姫君たちに文をおくる。この歌は、姫君たちを「山桜」の美しさに喩えながら、その「にほふあたり」と宇治の地を称賛するものでもあつた。また「おなじかざし」は、若菜下巻において紫の上が女三の宮に親交を求めめる場面に、「おなじかざしを尋ねきこゆれば、かたじけなければ、分かぬさまに聞こえさすれど、ついでなくてはべりつるを。今よりは疎からず……」〔若菜上九一頁〕とあるように、同じ血筋、先祖、同類を意味するものである。⁽⁴⁾ 勾宮の歌は、宇治の地を称賛しつつ、そこに暮らす八の宮家が同じ皇族であることを訴えて交誼を求めようとする、⁽⁵⁾ 多分に社交的なものであつた。

ところでこの歌は、その「おなじかざし」の花を手折る」という意をもまた含んでいる。「花を手折る」ことが女を手に入れることの喩であることはあえて指摘するまでもないが、しかしここにはやはり勾宮の隠された欲望の存在を読み取っておくべきであらう。美しい花を手折りましたよ、ほらあなた方の代わりとして――。姫君たちは、そこに込められた勾宮の秘めやかな欲望に返歌を躊躇せざるを得ない。これに老女房たちは「かかるをりのこと」つまり華やかな場に相応しい、座興的な即興歌としての返歌を勧める。勾宮の「をり」を重視した贈歌は、世馴れぬ姫君たちではなく、かつて都人として風流の振る舞いと嗜みを十分に身につけた老女房によつてかろうじて受けとめられることになる。

中の君の返歌は、姫君たちを限定する「おなじ」という言葉を排し、単なる「かざし」の花と一般化することで、勾宮の真意をうまくはぐらかすことに成功している。また「かざし」「をる」「花」「山」、さらに歌に続く言葉「野をわきてしも」⁽⁶⁾と、勾宮の贈歌と同一または類似の語句を多用することで、この「をり」に相応しい言葉遊びの面白さ、情趣を醸し

出してもいる。語り手が「いとをかしげにらうらうじ」という所以であろう。

しかしここで注意したいのは、匂宮の「野をむつまじみ」に対して、中の君が「野をわきてしも」と返している点である。諸注の指摘するように、匂宮の贈歌のこの箇所には山部赤人の「春の野にすみれ摘みにと来し我ぞ野をなつかしみ一夜寝にける」が引かれていよう。新編全集頭注は「なつかしみを」「むつまじみに替え、血のつながる親しさを強調」する、社交性を重視した詞であることを指摘している。これに対し中の君は「野をわきてしも」——わざわざこのこと定めて分け入ってきたではありませんまいと恋歌としてこれに返歌するのである。本来女の答歌は、相手の男の不誠実さを疑い、責め、詰り、躲すのが常套であり、中の君の答歌もこれを忠実に再現するものであった。しかし問題なのは、そのことよって中の君の答歌が匂宮の言外の恋情をも抑い上げ、結果としてこれに答える形をとってしまったということであろう。ここからは、へ声へならざるへ声へを聞きとってしまった中の君自身の言外のへ声へ、すなわち恋への憧憬もまた読み取れるのである。贈答に続く語り手の評言「こころわかぬさま」は、文字通り両者の意外なほどの心の接近を語っているのであった。

そもそも匂宮が姫君たちを「山桜」に喩えたのに対し、中の君はそれを斥け「山がつ」と自らを称している。勿論この言葉は自らを卑下する気持ちの表れとも言えようが、しかし「夕顔」「末摘花」「若紫」などと一方的に花に喩えられ、それにへ生き方へをからめとられてゆく正編の女君たちの姿とはあきらかに異質である。このような物語や男たちからお仕着せられるへ型へから逸脱してゆこうとする宇治の姫君たちの詠歌の特質は、既に橋姫巻において、薫から、

橋姫の心を汲みて高瀬さす棹のしづくに袖ぞ濡れぬる

〔橋姫一四九―一五〇頁〕

と詠みかけられたのに対して、

さしかへる宇治の川長朝夕のしづくや袖をくたしはつらん

〔橋姫一五〇頁〕

とあえてずらした返歌をした大君に先例を見ることができ。繰り返すが、宇治の姫君たちは男たちからお仕着せられ

る〈型〉に、決して従順ではない。そのような姫君たちの姿は、他に宇治中宿りの直後の場面の地の文にも見ることが出来る。宮（八の宮）も、「なほ聞こえたまへ。わざと懸想だちてももてなさじ。なかなか心ときめきにもなりぬべし。いとすぎたまへる親王なれば、かかる人なむと聞きたまふが、なほもあらぬすさびなめり」とそそのかしたまふ時々、中の君ぞ聞こえたまふ。姫君は、かやうのこと戯れにももて離れたまへる御心深さなり。

〔権本一七六頁〕

ここでは八の宮は、あくまで風流事、挨拶としての返歌を姫君たちに勧めているのであるが、注意したいのは、返歌の相手が最初から中の君に限定されていたわけではないということである。つまり話の順番としては「返事を勧める折々」に中の君が応じ、大君はそれには手も触れないということであり、それは決して大君が手を触れないために中の君が仕方なく返歌に応じてた訳ではないということである。中の君はこの「かざし」の贈答を機に父宮自身の勧め、またその庇護の下での贈答という安心感もあつて、何の抵抗感もなく贈答を繰り返していくことになる。

二、〈中宿り〉 追想の場面―和歌にみる中の君と匂宮の心情の近接―

宇治中宿りの翌春、京の花盛りに匂宮は「かざし」の贈答の一件を想起する。

花盛りのころ、宮、かざしを思し出でて、そのをり見聞きたまひし君たちなども、「いとゆゑありし親王の御住まひを、またも見ずなりにしこと」など、おほかたのあはれを口々聞こゆるに、いとゆかしう思されけり。

③つてに見し宿の桜をこの春はかすみへだてず折りてかざさむ

と、心をやりてのたまへりけり。あるまじきことかなと見たまひながら、いとつれづれなるほどに、見どころある御文の、うはべばかりをもて消たじとて、

④いづくとかたづねて折らむ墨染にかすみこめたる宿の桜を

なほかくさし放ち、つれなき御気色のみ見ゆれば、まことに心憂しと思しわたる。

〔権本巻二一四頁〕

今ここで匂宮とともに昨年の宇治中宿りを思い起こしているのは、「親王の御住まひをまたも見ずなりにしこと」——薫とともに対岸の宇治八の宮邸を訪れ、その樂の音を楽しんだ人々であった。実際に八の宮と接した彼らにとつて、その死は身近なものであり、命の儚さについての嘆きも口をついて出てくるのであるが、しかし匂宮にとつてその会話は、八の宮の不在を再認識させ、姫君たちへの恋情をますます募らせるものでしかなかった。また物語は、昨年中宿りの際に八の宮邸を訪れた人々のことを、「客人たちは、御むすめたちの住まひたまふらん御ありさま思ひやりつつ、心つく人もあるべし」〔権本一七四頁〕、「若き人々、飽かず、かへりみのみなんせられける」〔権本一七五頁〕と語っていた。しかし、その宇治中宿りを回想しているはずのこの場面では、姫君たちのことはまったく話題に上つてこない。このことは八の宮が、「まれまれはかなきたよりに、すき事聞こえなどする人は、まだ若々しき人の心のすざびに、物詣での中宿、往き来のほどのなほざり事に気色ばみかけて……なげの答へをだにせさせたまはず」〔権本一七七―一七八頁〕と、行きずりの旅人の興味本位の文には決して返事をさせなかつたという、まさにその旅人を我々に想起させるとともに、逆に「この春は」と意気込む匂宮の異常なまでの執心を浮かび上がらせるものとなっている。

このように並々でない関心のもとに詠まれた匂宮の歌は、昨年の「かざし」の贈答の際の感触、八の宮の忌み明け等も手伝つて、その思いを率直に表現したもので、それゆえに逆に姫君たちの反感を買つてしまうものでもあった。「かざし」は、本稿「一」で見えてきたように姫君たちを象徴しているが、今回の匂宮の歌は贈歌というよりも独詠的であり、むしろ決意表明に近い感がある。新編全集にも「傍若無人の発想。東宮候補でもある宮の高飛車な態度ともとれる」、「匂宮は、ときに高飛車な物言いをする。その三の宮という素性・地位の、怖いもの知らずの自信から出る言葉である」⁽¹⁰⁾とある。しかし好色人、風流人として名を馳せていた匂宮が、いくら東宮候補としての自負心、自尊心があるとしても、女心を解さない強引、傲慢だけの歌を送るであろうか。また中の君もそれに応えたりするであろうか。

次に掲げた表は、宇治へ中宿りゝの場面における贈答歌、並びにへ中宿りゝ追想の場面におけるの贈答歌を、同一または類似の語句によって便宜的に分けたものである。

【贈答歌の重層構造】

句宮①	中の君②	句宮③	中の君④
山（桜）	山がつの		
桜	花の	宿の桜を	宿の桜を
にほふ		（見し）	墨染めに
あたりに			（いづくとか）
たづねきて	（すぎぬ）		たづねて
同じかざし	かざし	かざさむ	
折りてけるかな	をる	折りて	折らむ
	たよりに	つてに	
	垣根を	へだてず	（こめたる）
	春の旅人	この春は	
		かすみ	かすみ

中の君②と匂宮③の歌の共通部分に……を施したが、一見して明らかかなように、匂宮③の歌は、中の君②の歌を受けて詠まれている。それもただ受けているのではなく、ほぼ同じ語句を使用して詠まれている。このことは、匂宮③の歌が宇治中宿りの場面における中の君の答歌の趣向をそのまま踏襲しているということであり、言うなら、前回の「かざし」の贈答の際の中の君の答歌の、その答歌という形になっているのである。確かに、いささか驕慢の誇りを免れぬ歌の詠み口ではあるが、しかし一言一句を踏まえるという細心さと、そこから繰り出される恋の訴えの大胆さは、中の君に「見どころある文」と感じさせ、返歌せざるを得ない気持ちにさせる、大きな理由の一つであったと考えられよう。

また、中の君の返歌の直接の動機は、「いとつれづれなるほど」なのであった。夏でも秋でもないへ春へのつれづれは、「宇治」の物語のあちらこちらに饅められていた。

(1) 御衣どもなど萎えばみて、御前にまた人もなく、いとさびしくつれづれげなるに……。〔橋姫一二三〜一二四頁〕

(2) つれづれとながめたまふ所は、春の夜もいと明かしがたきを……。〔椎本一七二頁〕

(3) ひとつとなく心細き御ありさまに、春のつれづれは、いとど暮らしがたくながめたまふ。〔椎本一七六頁〕

(1)は、八の宮家がまだ京にあった春のある日、琴を奏する幼い姫君たちの様子、(2)は、匂宮の宇治中宿りに際し、八の宮が姫君たちの将来を案じる様子、(3)は、中宿りの後、八の宮が姫君たちの将来を憂う様子である。父娘三人の慰む方のない暮らしの中で繰り返し語られてきたへ春へのつれづれは、八の宮家にとってへ春こそが、四季のうちでも殊更に深い物思いを誘われる季節であったことを意味している。⁽¹⁾と同時にへ春へのつれづれは、八の宮の姫君たちへの思いと抱き合わせに語られてもいた。姫君たちを身分不相応な暮らしの中に埋もれさせてしまうことを惜しむ八の宮にとって、へ春へは都社会への断ち切れない未練を炙り出す季節としてもあったのである。人気がない山里で、寄り添うように暮らしてきた父娘にとって、へ春への憂い、無聊が父宮だけのものでは考えられまい。日常化したへ春への夜長に綺羅星のごとく現われた匂宮一行に八の宮が都を想起し交流を求めずにはいられなかつたように、昨年都のはなやぎを体感してし

まったく中の君もまた、句宮の文に返歌をせずにはいらなかったのである。

中の君の返歌は「あるまじきことかな」と男の求愛を拒みつつも、一方で「うはべばかりはもて消たじ」と、その趣向に応えようとするものであった。図表では、中の君④と句宮①③の歌の共通部分に□を施したが、一見して明らかのように、中の君④の答歌は、句宮③の贈歌だけでなく、中宿りの時の句宮①の贈歌をも踏まえる形となっている。①―②、③―④が贈答関係にあることは自明であるが、前述のように②―③にも贈答関係が認められ、さらに①―④の照応にも着目するなら、④は①を吸収摂取して成り立っているとも言えよう。重層構造と呼ぶ所以である。

いったい何処と尋ねて折ろうというのか、墨染め色にかすみの立ち籠めている宿であるものを——というのが④の歌意であるが、中の君の心を隔てているものは「墨染め」色のかすみ、つまり八の宮の死であった。確かに姫君たちの悲嘆にくれる様子は、昨年八月二十日頃の死以降、繰り返して語られてきたものであるが、しかし中の君の悲しみが少しずつ薄らいでできていることは、以前のように大君に代返させることもなく「権本一九四頁」自ら進んで返歌に応じていることから容易に想像できよう。

また今回の答歌では、中の君は自らが「花」の喩であることも受け入れてもいる。一見拒否の態度を見せながら、また「あるまじきことかな」と思いながら、しかし句宮の「花」となることを受け入れる形で詠まれた歌——執拗に寄り添わされた言葉の数々は、もはや中宿りの場面におけるへことばへの遊びへの域を明らかに越えてしまっているであろう。

三、停滞する中の君物語―和歌と地の文の関係性から―

今まで二度の「かざし」の贈答の場面を、それぞれ考察してきたわけだが、本節では両場面を対比的に見てゆくことで、その類似点・相違点をさらに明らかにしてゆくことにする。

まず類似点であるが、そもそも匂宮の宇治中宿りは、本稿「二」で見えてきたように、八の宮家にとつては〈春〉のつれづれの中に起こった、大きな一つの〈事件〉であった。〈春〉のつれづれの中、八の宮は娘の将来を案じ、眠れぬ夜を過ごしていた。今中の君は、やはり昨年と同じ〈春〉のつれづれの中で返歌をしている。また、両者の交流の端緒となった匂宮の贈歌は、「かかるとをりにだに」という思いからおくられたものであり、中の君はこれに「かかるとをりのこと」として返歌をしたのであった。今中の君は、「見どころある御文の、うはべばかりをもて消たじとて」と、やはり「をり」を重視した歌を返している。つまり両場面の情況、設定は、かなり似通っているということができよう。

匂宮はこれに、一年という年月を経てすら何の変化も感じられない中の君の態度に落胆の色を隠しきれない。しかし中の君は本当に何も変わっていないのか。相違点としてあげたいのは、そこに八の宮、老女房といった他者が介在しないことである。振り返ってみると〈中宿り〉の贈答は、八の宮が邸に匂宮の和歌を呼び込み、老女房がその返歌の手ほどきをするので、かろうじて成り立っていたのであった。しかしその後、贈答は幾度も繰り返され、ついでこの〈中宿り〉追想の贈答になるのである。一年という時間は、その間に父宮の死、匂宮の熱烈な求愛に戸惑う中の君の心情を挟みこむことで中の君の精神的成長を語っているのであり、ゆえに他者を介在させないこの贈答の成立は、一見表面的には大きな変化は見えないものの、中の君の心の匂宮への傾斜——その後の結婚の可能性が示されているといえるのである。

以上、二度にわたる「かざし」の贈答を、地の文との関わりの中から考察してきた。両場面は、匂宮の宇治の姫君へ執心と、中の君の精神的成長——2人の心の距離の接近を語っていたのであった。しかしこれらの贈答歌は、贈答の言葉が返歌によって掬い絡めとられてゆくのみで、未来にひらかれてゆくこととはない。つまり、中の君②の答歌が匂宮①の贈答を、匂宮③の贈答が中の君②の答歌を、さらに中の君④の答歌が匂宮①③の贈答を踏まえるというように、新しく詠まれたはずの〈ことば〉は、過去の〈ことば〉に牽引されていってしまうのである。そうした〈ことば〉の循環構造または停滞状態の中で、中の君の物語はいつたん終息せざるを得ないのであった。

二人の当事者の間の関係性の中では、これ以上の展開は望み得ない。物語は第三者の介在・関与を要請することにならざるを得ないのである。しかしそれはこの二組の贈答が無効だということではない。和歌の応酬によって心の交流が果たされながらも、いわば熟柿状態を保ちつつ、その先に進めない飽和状態が現出していることを確認したかったのである。

注

- (1) 小町谷照彦「源氏物語の和歌」「源氏物語講座第一巻 主題と方法」(有精堂 昭和42・5)
- (2) 小町谷照彦「大君物語の始発―和歌的な始点から―」(日本文学24・11) ↓ 「大君物語の始発―「橋姫」「椎本」の展開―」(「源氏物語の歌」と表現」東京大学出版会 昭和59・8)
- (3) 「源氏物語」の引用本文はすべて、新編日本古典文学全集本(阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男校注・訳 小学館)に拠る。また、私に適宜傍線等を付し、下には巻名・頁数を記した。
- (4) 古語大辞典(小学館)には、「舞人は一両の場合、同じ花をかざすところから「同じかざし」の形で) 血筋、先祖。同類」とある。
- この部分について、河海抄以来多数の注釈書が伊勢の「わが宿とたのむ吉野に君し入らば同じ挿頭をさしこそはせめ」を引歌としてあげているが、疑問である。また宗雪修三氏も「椎本」巻における和歌言語の方法」(名古屋大学国語国文学43 昭和53・12)において考察を試みているが、結論は保留されている。
- (5) 清水好子氏は、「宇治の中宿り―作中人物の歌」(講座源氏物語の世界)へ第八集(有斐閣 昭和58・6)の中で、「同じ皇族の血を云々することは、八の宮家の誇りを重んじ、加えて相手の心を開かせるには無上の手だてである」と述べている。
- (6) 小町谷照彦氏は、注(2)論文において「匂宮の「野をむつまじみ」に形式を揃えているのは滑稽な感じで、諧謔的要素が強いように思われる」と述べている。
- (7) 一四二四 山部宿禰赤人が歌四首。なお引用本文は、新編全集「萬葉集②」(小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳 平成7・4)に拠る。
- (8) 新編全集「源氏物語⑤」一七四頁頭注一三。
- (9) 河添房江「花の喩の系譜―源氏物語の位相―」(源氏物語の喩と王権)有精堂 平成4・11)

(10) 新編全集「源氏物語」⑤ 二二四頁。頭注五、同頁鑑賞・批評欄。

(11) 拙稿「源氏物語」橋姫卷「水鳥の唱和」考―宇治の物語の（始発）として―（愛知淑徳大学国語国文 22 平成11・3）

（博士後期課程 2年）